

戦士

第4号

「戦士」編集委員会

戦略・戦術主義との根本的分岐にむけて

はじめに

戦略・戦術主義は、今なお、新旧左翼を貫いて広く深く浸透しているといつて過言ではない。戦略・戦術主義とは、権力奪取に至るみちすじ・見取り図を想定することをもって、自然発生する諸運動に方向性を与えようとする（すなわち種々の自然発生性のある特定の革命の型にはめ込まないとする）運動指導の在り方である。

本稿では、まず、この戦略・戦術主義に対する基本的な批判の視座を提起し、続けて、その具体的表れとして第二次ブントー7回大会決議、および『赤軍』No.4・No.5を取りあげ、検討を加えていく。

1. 戦略・戦術主義批判の基本的視座

戦略・戦術主義が不断に再生産される根本には、資本主義・帝国主義批判における日和見主義・中途半端がある。つまり、批判が資本主義・帝国主義（の運動の諸結果）へ

● 戦略・戦術主義との根本的分岐にむけて

1. 戦略・戦術主義批判の基本的視座
2. 第二次ブントー7回大会決議における戦略・戦術主義

◎主張の整理

- (1) 7回大会において描かれている「みちすじ」
 - (2) 第一の欠陥 — 「日帝権力を破綻させる」ということについて
 - (3) 第二の欠陥 — 「～として闘う」「意識性に高める」ということの無内容性について
 - (4) 第三の欠陥 — 労働者大衆の政治意識は段階的に成長するのか
3. 赤軍派—世界革命戦争路線に表れた戦略・戦術主義

● 「内ゲバ主義」「人民内部の矛盾…」という主張について

の弾効に収斂し、外在的な位置からのものとなってしまう結果、資本の運動を止揚していく方向性を措定しえず、権力奪取それ自身が自己目的化されてしまい、階級闘争が政治力学へと切り縮められてしまっているのである。言い換えれば、労働者階級による権力奪取一般が何かア・プリオリに善なるものとして措定され、その内容—政治的内実（労働者階級を支配階級へと組織することの歴史的意味・意義）が抜け落ち、悪なるブルジョアジー（国家）を善なるプロレタリアートがいかにして打倒するのか、という具合に、階級闘争を主に技術的なものとしてとらえる見方に、陥ってしまっているのである。

プロレタリアートはその階級闘争の一定の発展段階（階級・階層関係のある局面への移行）のもとで、ブルジョア国家権力を打倒し、プロ独権力を樹立しなければならない。ただしそれは、決して終局目標ではない。むしろそれは、終局目標（階級の廃絶、「能力に応じて働き、必要に応じて取る」を原則とする社会の建設）にむけた、不可欠であり決定的ではあるが、にもかかわらず、条件であるにすぎない。したがって、プロ独を、終局目標のための条件として

準備し組織しぬく党の指導性がとわれているのであり（ソ連では、プロ独は、新たな特権的支配的な階層の成立の条件に転化してしまった）、終局目標をより鮮明にすることと同時にその達成のためには、労働者階級に、いかなる能力を獲得させていかなばならないのか、いかなる自覚を成長させ、組織性・規律性を引き出し、いかなばならないのか、ということへの解答が要請されるのである。

プロ独一般を指定すること（それは、ブルジョア権力への告発に現実批判の水準がとどまっていることと同義である）では、かかる要請に応ええないことは明白である。現実批判を不徹底のまま放置しているがゆえに、現実止揚の方向性が見極められず、またそうした方向性をもって現実に接近し現実をとらえることもできないのだ。ここにおける欠陥を取り繕うものとして、革命の「みちすじ」や見取り図の導入があるわけであるが、そうした戦略・戦術主義にもとづく現実への接近は、あれこれの思い入れや恣意的な解釈、あるいは意味付与のもとでの「接近」にほかならず、したがって、現実への拝跪と引き換えでの現実への接近にほかならない。

問われているのは、あくまで現実を変革すること、であり、そうした位置（現実への根本的批判の位置）から現実に接近し、現実を広く深く全面的に、かつ動態的にとらえることであり、そしてそこに止揚の方向性（プロレタリアートの階級性）を刻印することである。

治権力打倒闘争から、権力奪取に至る階級意識にまで高めなければならない（経済闘争の延長上には権力奪取の闘いは生まれない）。

- ・日帝国家権力は、合理化攻撃、賃金抑制攻撃を、帝国主義的統治機構への全社会的再編攻撃の一環としてかけてきている。
- ・我々は個別経済闘争を帝国主義的再編攻撃を粉碎する意識的闘いに集約し、高めなければならない。
- ・この意識性に支えられた個別闘争のエネルギーが、反戦反帝闘争と結合し、更に帝国主義権力打倒の意識性に高められるのである。
- ・階級形成の今日的実践形態とは、このようなものである。

- ・生産点、生活点の個別諸闘争を反戦反帝闘争へ結合させる環として「帝国主義的統治機構への全社会的再編」にたいする闘いが提起されなければならない。
- ・種々の個別の攻撃が、日帝世界戦略の国内攻撃であること、つまり、国民統治機構を帝国主義的統治機構へ全社会的に再編せんとする攻撃であることを暴露し、「帝国主義的統治機構への全社会的再編」を粉碎するという意識性に高めなければならない。
- ・日帝の危機の外化である侵略反革命に対する闘いと、帝国主義的世界的動揺を基底とする大合理化、賃金

2. 第二次ブントー7回大会決議における戦略・戦術主義

◎主張の整理（任務―第二章より）

Ⅰ反戦反帝闘争と七〇年安保の革命闘争に占める位置

- ・世界革命の旗の下、国際反戦運動を国際反帝反政府闘争として闘いぬく。
- ・七〇年安保闘争を国際反帝闘争の一大焦点として闘い、プロレタリア日本革命と世界革命の展望を切り開く。
- ・日帝の世界戦略に、反戦反帝闘争を組み、敵の戦略の実施を實力で追いつめていくなか、プロレタリア本隊の意識状況を反戦意識から、反権力意識へ、更に反帝意識に、高めていく。

Ⅱ「帝国主義的統治機構への全社会的再編」との闘いへ個別闘争を集約せよ

- ・日帝の侵略反革命路線に対応して国内政治攻撃の性格が規定される。即ちそれは、国内統治機構の全社会的な帝国主義の再編攻撃となる。
- ・この政治攻撃の性格は、国際通貨危機の動揺を基底とした合理化攻撃、賃金抑制攻撃と同時に進行する。従って、個別経済闘争を、實力闘争として徹底的に闘い抜き、生産点で形成された資本への闘争力を、全人民的闘争としての反戦反帝闘争へ発展させ、政

抑制に対する闘いを通して、日帝権力を破綻に追い込むのである。帝国主義的統治機構への再編との闘いは、この二つの闘いを結合し、発展させる環である。

これが7回大会に貫かれた政治基調である。この基調は今日においても、ブントシンパのノンセクトの運動体、活動家に広く見られる、運動観（戦術観）・帝国主義観である。

「帝国主義的再編粉碎！」というスローガンも、「侵略反革命に向けた帝国主義的国内総再編の一環としての帝国主義的再編、云々」といった形で語られていることに端的に表れているように、この政治基調の影響のもとに位置している。

以下、戦術戦術主義の具体的表れのひとつとして、かかる基調の欠陥について、いくつかポイントをあげて、見ていく。

(1) まず、この7回大会において描かれている「みちすじ」について整理しておこう

①運動の目標は、一方には日帝権力（の世界戦略）の破綻、もう一方には「プロレタリア本隊」の意識を（個別闘争の意識↓）反戦意識↓反権力意識↓反帝意識へと高めていくこと。

②そのための運動の主軸として安保闘争＝国際反戦反帝闘争（日帝の侵略反革命、世界戦略との闘争）をすえる。

③運動の副軸として合理化、資金抑制との闘争をすえる。
④主軸の闘争と副軸の争を結合させる。『かけはし』として一帝国主義的統治機構への全社会的再編一との闘争を提起する。

(2) 第一の欠陥 —— 「日帝権力を破綻させる」ということについて

「日帝権力を破綻に追い込む」あるいは「日帝の延命戦略を粉砕する」といったふうに語られているのは、一種の自動崩壊論である。ここに置かれている発想は、帝国主義を主としてその政策（の体系）としてとらえ、政策（上部構造）によって帝国主義が延命しているとすることであら、これの政策の環を見抜き、それを粉砕すれば、帝国主義を打倒することができる、あるいは打倒の情勢を切り開くことができる、というものである。

しかしこれは、現実把握における転倒である。資本主義・帝国主義はあくまでも、資本・独占資本の運動によって自己を再生産しているものであり、そのもとに国家の諸活動・および諸形態を従属させているのである。帝国主義を硬直した政策体系としてとらえることは、誤りである。

—— 一般に政治的民主主義は、資本主義のうえに立つ上

「プロレタリアードは、共和制をふくめたすべての民主主義的要求のための闘争を、ブルジョア打倒のためのその革命闘争に従属させることによってはじめて、その独自性をたもつことができる。」

（『帝国主義と民族・植民地問題』 p.21）

かかる意識性をこそ継承しなければならない。

(3) 第二の欠陥 —— 「〜として闘う」「意識性に高めるといふことの無内容性について

一 国際反戦運動を国際反帝反政府闘争として闘いぬく
一 安保闘争を国際反帝闘争の一大焦点として闘いぬく
一 個別経済闘争を帝国主義的再編攻撃を粉砕する意識的闘いに集約し
一 この意識性に支えられた個別闘争のエネルギーが、反戦反帝闘争と結合し、更に・・・権力打倒の意識性に高められる」

「みちすじ」による運動指導の内容の貧困が、これらの主張にくっきりと表れ出ている。

結局ここで語られていることは何か、というと、要するに二次ブントの提起する「みちすじ」を承認するものが、運動を指導し、運動をその型にはめ込む、ということ以上のものではない。

民主主義のための闘争と社会主義のための闘争を結合し、

部構造の可能な諸形態の一つ（理論上は、『純粹』資本主義にとって正常な形態であるが）にすぎない。資本主義も帝国主義も、事実がしめしているように、あらゆる政治形態のもとで発展し、それらすべての形態を自分にしたかわせる。だから、民主主義の諸形態のうちの一つとその諸要求のうちの一つの『実現不能』をうんぬんするのは、理論上ただしくない」

（『帝国主義と民族・植民地問題』 p.13）

ということである。

ある特定の政策を取り出して、それを阻止することを、帝国主義の打倒との関係で特別の意味付与を行いストレートに結びつけることは、客観的には、『実現不能』論に陥ってしまっていることを意味するにほかならない。

もちろん、種々の政策と闘争すること、その闘争の意義を、帝国主義の打倒の問題との関係で、暴露し、宣伝することは必要であり、重要である。ただし問われているのは、そこにおける相互関係をどうとらえること（前者を後者に従属させて取り上げ指導を貫徹すること）であり、両者を直結させること、そのための意味付与をすることではない、ということである。

「民主主義のための闘争と、社会主義のための闘争とを結合し、前者を後者に従属させるすべを知らなければなりません。この点にすべての困難があり、この点にすべての核心があります。」

（『イネッサ・アルマンドへ』全第3巻）

前者を後者に従属させるといふ困難な任務は消し去られ、そのかわりに、無内容な図式と、その図式を認識するといふ以上には意味を有していない、意識性、なるもの、が居座っているのである。

(4) 第三の欠陥 —— 労働者大衆の政治意識は段階的に成長するののか

決議では、「階級形成の今日的実践形態」なるものが提起されており、その内容は、個別経済闘争を闘う意識↓帝国主義的再編攻撃を粉砕する意識↓反戦反帝闘争を闘う意識↓帝国主義的権力打倒の意識、へと段階的に高め上げていく、という具合に語られている。だが、はたして労働者大衆の政治意識は、そのように段階的に、一定のコースを通過して成長していくものとしてあるのだろうか。否、である。もちろん、発達した、全面的な政治意識が、一挙に労働者に獲得されるわけではないだろう。ただし、そのことと、政治意識の発展過程を段階的に一定のみちすじとして設定することは、別のことである。個々の労働者が、政治意識をどのように発展させていくかは、個々のことであり、偶然的なことである。

政治意識の発展過程を、何か特別の論としてまとめあげようとする試みは、結局は、勝手に想定した発展過程の各々の段階における拝跪した指導の体系化にしかたなりえない。というのは、階級的・政治的意識をもたらすことのできる

唯一の分野は、すべての階級および層と国家および政府との関係の分野、すべての階級の相互関係の分野だからである。かかる分野において、プロレタリアートの階級的評価を——評論一般としてではなく、実際にプロレタリアートがとるべき政治的態度として——提出していくこと、すなわち、全面的政治暴露を組織していくことこそが、政治意識の発展の唯一の武器であり、労働者大衆の種々の自然発露性と切っても切れないように結びつきながら、共産主義の側へ不断に引き付けていく武器なのである。

プロレタリアートは自らの階級性を切り売りすることはできない。それはブルジョアジーへの思想的屈服になるほかはなく、ひいては、ブルジョアジーの思想を強めるものにならざるをえない。

—問題はこうでしかありえない——ブルジョア・イデオロギーか、それとも社会主義的イデオロギーか、と。そこに中間はない(なぜなら、人類はどんな『第三の』イデオロギーもつくりださなかったし、それにまた総じて階級矛盾によって分裂させられている社会に、階級外の、あるいは超階級的なイデオロギーなどは、けっしてありえないからである)。だから、およそ社会主義的なイデオロギーを軽視すること、およそそれから遠ざかることは、とりもなおさず、ブルジョア・イデオロギーを強めることを意味する。—

—労働運動の自然発露的な発展は、まさに運動をブルジョア・イデオロギーに従属させる方向に……すす

3. 赤軍派—世界革命戦争路線に表れた戦略・戦術主義

続いて赤軍派における戦略・戦術主義の表れについて見ていく。赤軍派の特徴は、「××闘争を権力闘争として闘う」という意味付与(すなわち政策反対政治への権力問題の接ぎ木)として戦略・戦術主義を導入したのではなく、権力闘争(革命戦争)を闘い抜くことに理論的根拠を与え、ものとして、戦略・戦術主義を導入したことである。以下、具体的に検討していこう。

『赤軍』(MOT)において一過渡期世界の階級闘争の歴史的普遍性なるものが、三つの基本テーゼとしてまとめられている。すなわち、

・第一テーゼ

「被支配階級としてのプロレタリアートは、過渡期世界突入を契機に世界武装プロレタリアートに成熟・到達し、ブルジョアジーとの闘争を通じ、現実形態的に自己の矛盾の止揚を開始し始めた」

・第二テーゼ

「帝国主義の運動に媒介され、ブルジョアジーはいせんとして支配階級であり、プロレタリアートは被支配階級であり、二大階級の基本関係は変わらないが、にも拘わらず、ブルジョアジーは、この闘争関係に於いて、受動的防衛的であり、プロレタリアートは能動的

むのである。なぜなら、自然発露的な労働運動とは組合主義であり……組合主義とは、まさしくブルジョアジーによる労働者の思想的奴隷化を意味するからである。だから、我々の任務は……自然発露性と闘争すること、ブルジョアジーの庇護のもとにはいろうとする組合主義のこの自然発露的な志向から労働運動をそらして、革命的社会民主党の庇護のもとに引き入れることである」(『なにをなすべきか』p.63)

ということである。

攻撃的であり、両者の制約関係が転覆過程に入ったこと

・第三テーゼ

「かかる階級闘争は、より高次な能動的階級闘争として、世界武装プロレタリアートをして(イ)世界革命を世界プロ独に向け、単一の、永続的な、論理的、時間的に同時なものとして成長、発展せしめる。(ロ)この革命の形態は、世界革命戦争である。(ハ)この革命と形態は、世界武装プロレタリアートにとって唯一「世界党—世界赤軍—世界革命戦線」として成長発展する」

この三つのテーゼを「歴史的論理的に説明」していくと言っているものの、その後の展開の中で、説明しているとはとても思えない。むしろ、この三つのテーゼがそもそもア・プリオリに設定されており、その後の展開はその後づけのための歴史解釈、現実解釈にしかなりえていないのである。

では何故、どこから、赤軍派がこのようなテーゼ(歴史法則、闘争形態の革命戦争への一面化)を導き出してきたのか、という点、それは、武装闘争への実践的志向であり、運動が権力問題に達していることに対する直観である。そこにおける自然発露性の特別の理論へのまとめあげとして、これらのテーゼがあるのである。

当時、運動は軍事上の壁に突き当たる。赤軍フラクに結集した部分は、この軍事上の達着に対する解答を、党の綱

領・戦術・組織のトータルな転換 党の革命として煮詰め上げきっていくことを中途半端に放棄したまま（党内闘争における敗北、軍事的突破の画策と挫折、分派の強行という形で）、武装闘争―軍事組織建設に着手していった。そこにおける、政治的欠陥―自然発生性への拝跪の穴埋めをするものとして、従来の、政策反対政治への権力問題の接ぎ木としての戦術・戦術を、権力問題自体をとらえ権力闘争（革命戦争という形態に一面化されているわけだが）を貫徹していくための戦略・戦術（革命のみちすじ）へとスライドさせていくのである。続けて見ていく。

「10・2の敗北は、我々が指摘した①ビンゲバ軍団では、闘いえないこと、②世界革命戦争Ⅱ内戦の突破□としての武装蜂起の政治的階級の位置付けに武装された『軍事的武装』の問題を・・・再び大衆的に確認することのみに終わった。」

―佐藤訪米を阻止するには、今秋、大衆がいみじくも語り合ったように『訪米などはしてはおられない事態を創る』ことであり『沖繩問題などに拘わり合っていないら、体制が危機になる』という『安保―沖繩政策』の政治的枠組をのり越えた『権力問題』を突き出すことであった。」

「だが、かかる『政治危機の創出』は、政治党派にとって、これを実現に移すことに於ける革命的スローガンは、このようなあいまいなスローガンに表現されるのではなく、まごうことなく『武装蜂起の貫徹』であり、

それ以外の何物でもない。」

「政治危機は、共産主義者にとって『権力問題』『武装』の問題と切り離せないものであり『政治危機』の自己目的的創出などは、実際にはあり得ないのである。」

「10・2の敗北こそ党派により独自の『武装蜂起の政治的・軍事的・組織的準備』を抜け落とした『大衆闘争の延長線上に政治危機を願望する』大衆の自然発生性に拝跪した敗北の典型であった。」

「10・2の勝利とは、大衆の『政治危機待望』と即自的・直接的に結合することではなく、これとは、日常的には全面的に分離した世界から『前段階蜂起Ⅱ世界革命戦争』の要求する、換言すれば『革命を勝利まで永続させる』為に考え尽くされた政治的・軍事的・組織的準備と、その大胆な貫徹によって、大衆の『政治危機創出の要求』と根底的に結合することこそ必要であったのだ。」

「大胆に、大衆の『政治危機願望』に『権力問題Ⅱ武装蜂起』で結合すること・・・これこそが現実に発展する革命の第一段階である。」

「蜂起は、自衛隊・米軍の反革命戦争に遭遇し・・・これと闘うには、一国に於ける意識的層の武装のみでは対抗し得ず、これが、全人民の武装と権力に物質化される国際的、・・・『世界革命戦争への内戦の転化』の準備が必要であるのだ。前段階蜂起の維持は唯一、前段階蜂起という、過渡期世界に於ける、攻撃的

意識性の性格からして、その本来の理由からしても、世界革命戦争としてしか維持されはしない。」

「前段階蜂起として突き進んだ蜂起Ⅱ革命を維持し、発展させるには・・・後進国に於ける革命戦争を、日米の革命戦争と結合し、単一の世界革命戦争として推進する道しかないのである。これこそが革命の第二段階である。」大衆の高次の自然発生性Ⅱ『政治危機待望・武装の必要性の直感』は、党の前段階蜂起の目的意識性に媒介されて、彼らが、敵権力を解体して、蜂起にのぼりつめるや否や・・・蜂起の貫徹Ⅱ内戦を、党の世界革命戦争の意識性によって、彼らの一國性を世界性に昂めねばならぬ。」（『赤軍』No.5）

ここでは、諸階級・諸階層の相互関係についての考慮はなされることなく、プロレタリアートの世界武装プロレタリアートへの転化、ブルジョアジーの受動・プロレタリアートの攻勢、という先のテーゼを背景としながら、へ党の前段階武装蜂起、大衆の呼応、世界革命戦争への永続化、という主観的な革命の見取り図が提起されている。かかる路線的枠組みを正当化するという観点から現実をとらえよう（すなわち、解釈しよう）とするがゆえに、「前段階蜂起は『プロ独か、ファシズムか』の先行的対決である」という具合に意味付与を行い、ブルジョア統治形態の転換をめぐる闘争に権力問題を接ぎ木する典型的な民主主義派（当時のいわゆる『八派政治』）の権力問題への接近の仕方と

の分岐をあいまいにしているのである。「連合赤軍」に象徴される権力への敗北と、大衆運動の昂揚の波の後退という情勢に際会して、多くが清算主義（軍事反対派）へと流れていったことも、ある意味では必然であったといえよう。運動の逢着問題に正面から向き合い、応え抜こうとしながらも、党内闘争への敗北を合理化し、党の革命を中途半端に放棄した赤軍派の権力問題への接近は、直観的で、浅く（歴史解釈・現実解釈による根拠付け）、狭いもの（闘争形態の革命戦争への一面化）にとどまっていたといわざるをえない。我々は、この赤軍派の敗北を教訓としながら、ブントの党の革命の事業を継承し、戦略・戦術主義と根本的に分岐した地平に立つ、単一非合法党建設の戦いに、断固結合していかなければならない。

「内ゲバ主義」「人民内部の矛盾……」

という主張について

党派闘争の暴力的展開、及びそれと結びついた形での大衆運動体・活動家に対する諸党派の暴力的統制といった階級闘争の現実に対して、「内ゲバ主義」「セクト主義」といった言葉をもってなされる批判、あるいは「人民内部の矛盾の正しい処理」といった言葉の配置が、その「用語」の使い方や提出の位置を異にしながらも、第4インター、戦旗・共産同（以下、戦旗派と略）本稿では戦旗派とはすべて戦旗・共産同の略称として用いる）、構改系諸派などの党派や無党派活動家によってなされている。この点を『戦士』3号の内容を受けて、もう少し詳しく見ていこう。

I

こうした主張はより具体的には「内ゲバ主義は人民内部に於いて自己の支配に従属しないものを有形無形のあらゆる暴力的手段によって抑圧し、屈服させようとする……」（第4インター『許すなテロ襲撃 No.2』p.30）「内ゲバ主義は階級の内部から矛盾と対立をおり、ブルジョア国家権力の打倒とプロレタリア権力の樹立に向けた階級の政治的統一の道を破壊する。」（同前p.31）などとして提出されている。

ここで批判されているのは、党派闘争・路線闘争を暴力

的に遂行していくという闘争の形態・方法である。しかし、プロレタリアートは、党派闘争を暴力的に展開することを一般的に否定することは決してできない。何故なら異なる党派が存在し、そこでの闘争が存在するのは、人類が階級に分裂し、そこでの各々の階級の利害の対立と衝突が存在しているからであり、これを最も鋭敏に反映するものとして党派闘争が存在するのである。プロレタリアートにとって自己の経済的解放を実現する為に、ブルジョアジーの政党を暴力的に解体すること、すなわち自らの階級の独裁を実現することは不可欠の義務である。ここでは是非とも見ておかなければならないのは、少なくとも現在の階級闘争が大ブルジョアジーの政党＝自民党対プロレタリアー

トの政党という単純な図式では、決してあらわれていないことである。このことの一要因としては、今日の帝国主義の寄生性の増大に伴って、労働者階級が上層部分と下層部分に分裂し、上層が自らの利害を大ブルジョアジーに接近・癒着・融合させていること、がある。プロレタリアートにとって、そうした労働者上層の利害を代表しようとする政党との対立は、ますます非和解性を帯びざるをえないし、である以上、その対立が暴力的なものへ発展することを否定することはできない。

その意味で、「人民内部」なる主張は、現実の階級・階層間の相互関係とそこに基づく政党間の対立関係・闘争を極めてあいまいにするものであり、「ブルジョア国家権力の打倒とプロレタリア権力の樹立に向けた階級の政治的統一」というプロレタリアートの任務を、せいぜい自民党政府の打倒とそれを実現する反自民統一戦線の形成という任務に落とし込めるような路線と結びついたものとして、存在しているのである。

では、こうした第4インターを……第4インターの諸君の対処から生まれるのは『暴力は良くない』とか『特定のイデオロギーに凝り固まった党派を作るから内ゲバが起ころ』といった小ブル的自然発生性に基づく右翼的な無党派主義の台頭……（戦旗・共産同『理論戦線』23号）『全人民的政治勢力の形成を……』以下、戦旗派の主張の引用は全てこの論文からのものである」とする戦旗派はどうか。

彼らの特徴は、「革命的左翼の戦闘性・暴力性への人民の支持はそれが日帝国家権力に対して行使される故に作り出されたのであり、戦闘性・暴力性が『同志殺人』や内ゲバの構造化として発現されるならば、人民の自然発生性はわれわれ革命的左翼から遠のいていかざるを得ない。」（a23）という具合に、国家権力に対する暴力と、党派（党内）闘争に於ける暴力を別個のものとして分離し、それを対立するものとしてとらえるところにある。

しかしこの分離・対立による図式は全く恣意的である。連合赤軍の党内闘争を「権力の弾圧との関係でのいわば極限的情況のなかでひきおこされた行為（p.23）などと心理学者風に評論するのは誤りである。問題は、日帝国家権力に対する暴力の行使が、それを担う組織の団結の内実を、反政府一般ではなく権力奪取・プロ独を基準にした団結へと転換することを問うたこと、それに対して「共産主義化」の内実がその解答たり得なかったこと、である。又、中核派の一カクマルとの内戦にしても、彼らの先制的内戦戦略という独特の戦略・戦術図式において日帝との闘争・内戦の一環として位置づけられていることを見ても、分離・対立による批判が意味をなさないことは明らかである。

戦旗派の分離・対立に基づく批判は、彼らの組織する日帝国家権力に対する暴力の行使が、未だ連赤……において問われた問題を組織的課題としてのぼらせる水準にはない、ということを自己暴露するものに他ならないのである。

では、次に「内ゲバ主義の克服」の方向について、どのように提起されているのかについて、見ていこう。第4インターの諸君は、中核派の「官僚的独裁と内ゲバ主義の対応の拡大」として「組織外の大衆運動に対するセクト主義の拡大と『対革マル戦争』最優先による大衆の実力闘争への日和見主義。他方彼らの組織内においては一〇年以上も党大会すら開催されていないという官僚的組織運営と内ゲバ主義の方法をそっくり適用した『分派』的傾向への統制・排除。これが中核派の七〇年代内ゲバ主義の全面開花を通して作られてきた組織のあり方である」（『許すなテロ襲撃 No. 21 p. 30』）とする。だが、これに対し彼らは大衆運動内での実践を一般的に強調し、プロレタリアートの「道徳」なる言葉を対置するのみである。あるいはプロレタリア民主主義の対置である。いわく「この闘い（内ゲバ主義を掃する闘い）は闘う戦線の内部でのどんな小さな暴力にも反対してプロレタリア民主主義を確立するための闘いである。路線や意見の相異を暴力で『解決』しようと願望する一切の傾向、大衆団体をひきまわしたり、セクト的な立場を押しつけたりする一切の策動に反対して、闘うものごおしの国家権力に対決する真の団結を築かねばならない。」（『許すなテロ襲撃』 p. 11）

結局、彼らの主張は、彼らが挙げつらう中核派の「否定

的現実」が中核派の革命路線のどのような欠陥によってもたらせているのか、それを自らはどう克服しようとしているのか、ということとを全く捨象したまま、道徳や「……の策動に反対して」という立場一般をプロレタリア民主主義の内容として語っているのである。

既に『戦士』3号で提起したように、中核派の三里塚闘争を試金石とした党派闘争の展開、大衆運動指導においてあらわれている種々の欠陥は、彼らが階級闘争全体の中の革命党としての自らの位置を、戦略・戦術の司令部として設定することによって、先制的内戦戦略（三里塚二期決戦、革命的武装闘争という彼らの戦略・戦術を通してしか現実の階級闘争に対して指導関係を作ることができないという、彼らの路線の根本的誤りに基づいている。これは、道徳や立場といった不明瞭な願望や行政的対応では決して克服することはできない）

（又、官僚主義・セクト主義にプロレタリア民主主義を対置する際、構改革の諸派に代表されるように、その身を中央集権主義の否定や複数政党制の原則化等として提出する部分も存在している。これらの主張については、別途に検討・批判を加えていく必要がある）

こうした第4インターに対して「第4インターの諸君は……全く大衆運動主義的に『内ゲバ主義との闘い』を位置づけた」（p. 27）と戦旗派は批判している。彼らの主張は、「革命党相互の党派闘争を内ゲバによってではなく対日帝

実力闘争の戦闘的実現と、そこにおける人民大衆の支持の獲得をめぐる遂行するという原則的対処」（p. 27）、「内ゲバ主義を排し対日帝国家権力との実力闘争によって階級闘争の勝利を切り拓かんとする、わが同盟の戦略的方向」（p. 28）というものである。先に見たように、戦旗派は国家権力に対する暴力の行使と党派闘争における暴力の行使の相互関係を全く無視することによって、党派闘争がストリートに暴力的に展開されることに対し「内ゲバ主義を排し」といった立場で「実践的に乗り越え」ることができると考えている。

しかし、こうしたことが可能であると戦旗派が幻想するのは、彼らが中核派ほどに自らの戦略・戦術主義を純化・徹底化していないが故である。何故なら現実の階級闘争を革命のみちすじで指導しようとする限りに対して、そうした図式ではとらえ切れない自然発生性に対しては、それらをかきその図式の中に組み込み、統制するのか、ということが指導の中身とならざるをえないからである。

問題なのは、新左翼諸党派が、労働者下層部分の利益を代表するということの中身を、現実の階級闘争に恣意的な革命のみちすじをあてはめ、その下にいかにかに統制していくのか、ということに歪小化し、その図式の違い、たとえば、「三里塚か?」「日韓か?」等で分裂し、対立しているという点であり、そうした狭い政治の下にあるかぎり、武装した党の登場は、不断に党派闘争の暴力的な展開として立ち現れてこざるをえない、ということである。

以上、第4インター、及び戦旗・共産同の主張を取り上げ、検討してきた。結局、彼らは、党派闘争の暴力的展開という現実が再生産されている根拠を切開しようとして、そのあらわれへの反発、結果への「批判」——すなわち外在的批判にとどまっているのであり、「内ゲバ主義」なるレッテルを持ち出し、自分はそれとは無縁である、という薄っぺらな態度表明ですませているのである。

しかし、こうした態度表明のみによって、「人民内部の矛盾を正しく処理する」ことができると考えているとすれば、それは大きな間違いである。例えば、三里塚分裂の際、横堀派農民が中核派排除に動いた時、インター・戦旗派を含め多くの横堀派支持党派が、この動きに安易に迎合し同調したわけであるが、このことが客観的に意味するのは、少なくとも当時の三里塚闘争の局面をめぐって、中核派が一人民の外に立つ部分であるということとを宣告した、ということにほかならない。にもかかわらず、「人民内部」云々を無前提に持ち出すのは、全くの都合主義でしかない。

党派闘争の暴力的展開という現実の前に、プロレタリアートにとって問われているのは、今日の党派闘争の枠組みそのものであり、党派闘争の仕方が暴力的か討論によるものかということに目を奪われてしまうのではなく、戦略・戦術をめぐる狭い党派闘争の枠組みを、革命の目的・任務を軸とする綱領・戦術・組織をめぐる枠組みにとって代えていく点であり、この事業に結集することに他ならない。

